
兎の決意

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兎の決意

【Nコード】

N8963P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

飼い主の絢子ちゃんにとても可愛がってもらっている兎の三郎。彼は彼女を護れるように強くなろうと決意して。兎もこう考えたりするかm知れません。

第一章

兎の決意

兎の三郎はいつも飼い主の絢子ちゃんにとっても可愛がってもらっています。それで絢子ちゃんが大好きです。

それで、です。いつもこう思っていました。

「僕絢子ちゃんの役に立ちたいな」

「役に立つって？」

「どうやって？」

三郎と一緒に飼われている同じ兎の一郎と二郎が彼に尋ねます。

三匹は兄弟なのです。

「絢子ちゃんの為になっていうけれど」

「どうやって役に立つんだよ」

「そう言われると」

兄弟達に聞かれるとです。困った顔になる三郎でした。

「どうしようかな」

「絢子ちゃんいつも僕達にとっても優しいけれどさ」

「大事にしてくれるけれどね」

「だから余計にだよ」

ここでまた言う三郎でした。

「絢子ちゃんの為にさ」

「だからどうやって？」

「どうやって役に立つの？」

また三郎に尋ねる二匹でした。

「それが問題なんだけれど」

「どうやって？」

「うづんとね」

三郎は首を右に捻って考えました。そうしてです。

「それじゃあ」

「それじゃあ？」

「絢子ちゃんを守るよ」

「こつ言うのでした。」

「絢子ちゃんは僕が守るよ」

「そうするって？」

「守るっていつの？」

「うん、そうするよ」

「二匹にまた言うのでした。」

「絶対にね」

「守るってどうやって？」

「僕達兎なだけけれど」

一郎と二郎はここではこのことを二郎に言います。自分達が兎だとです。

「誰かを守るってできる？」

「爪も牙もないんだよ」

「それで守るって」

「どうやって？」

「確かに牙も爪もないけれど」

三郎もそれは否定できません。あるのは前歯だけです。

「それでも。何とかするよ」

「じゃあ頑張って」

「そこまで言うんならね」

兄弟達はこつ三郎に言います。

「どうするかはわからないけれど」

「それでもね」

「頑張るよ。とにかくね」

こつ話してでした。三郎がまずしたことはです。やたらと餌を食べてあちこちを走り回るのでした。まずはそうしはじめたのでした。

一郎と二郎はそれを見てです。また言うのでした。

「あのだ、それ何？」

「何してるの？」
「鍛えてるんだ」
三郎はそうしていると答えます。
「身体をね」
「鍛える？」
「どうして？」
「絢子ちゃんやお母さんが観てるあれ」
「ああ、テレビか」
「テレビだね」
「あれでやってたんだ」
そのテレビからだというのです。
「鍛えれば強くなるってね。ずっと前にやってたの思い出して」
「それで今鍛えてるんだ」
「そうだったんだ」
「うん、そうなんだ」
こう兄弟に答えます。
「それでね」
「うん、それで」
「鍛えてそれからは？」
「強くなるんだよ」
また兄弟に答えました。
「絢子ちゃんを守る為にね」
「ああ、強くなるんだ」
「そうしてなんだ」
「僕絶対に強くなるから」
また言います。

第二章

「絢子ちゃんの為だから」

「絢子ちゃんの為なら何でも」

「そうするんだ」

「うん、そうするよ」

こうしてでした。彼はさらに走ってもりもりと食べます。けれどそれをしても動きが速くなるだけでした。強くなったという感覚はありません。

それです。三郎もこのことを不思議に思いました。

「あれ？」

「強くなつてない？」

「若しかして」

「そうみたいなんだけれど」

困惑した面持ちで兄弟に答えます。

「どうしてなのかな」

「やっぱり兎だからじゃないの？」

「やっぱり」

二匹はその原因をまた自分達自身に求めます。

「それでなんじゃないかな」

「僕達兎なんだから」

「兎だからつてどうしてなんだよ」

三郎は兄弟達の言葉をの丸い目を少し怒らせて言い返します。

「兎は強くないっていうのかい？」

「だってねえ。兎だし」

「兎だとね」

「強くなるのはね」

「ちよつとないんじゃないかな」

一郎と二郎はここでこう話すのです。

「大体僕達つて敵が来たら逃げるじゃない」

「それが隠れるか」

「それで強くなるってな」

「ないんじゃないかな」

「それはないよ」

三郎はです。このことはどうしても認めようとはしませんでした。それで少し意固地な調子になってです。兄弟達に言い返します。

「絶対にね」

「絶対につて言っけれど」

「兎は兎だしね」

「そうだよね」

「強くなるのは無理だよ」

それでも二匹は言います。ですがそれでもです。三郎はあくまで餌をもりもりと食べ走り続けます。そんなことを続けていたある日のことです。

走った後で休憩して部屋の隅で寝転がっている三郎のところに行きます。その絢子が来ました。そうしてそのうえで彼のそのふわふわの毛を撫でながら話してきました。

「そこまで走つてどうしたのかしら」

（絢子ちゃんを守る為だよ）

三郎も言います。しかしこの言葉は兎の言葉なので絢子にはわかりません。

（それでなんだよ）

「そんなに逃げる練習しなくていいのよ」

（逃げる練習じゃなくて鍛えてるんだよ）

「だってね」

（だって？）

「私がいるから」

こう三郎に笑顔で言っのでした。

「私が守るからね、三郎は」

(えっ、守る!?)

三郎はその言葉を聞いてです。思わず言ってしまった。しかしそれでもです。兎の言葉なので絢子にはわからないのでした。

(あの、僕が絢子ちゃんを守るんだけれど)

「一郎も二郎もね」

けれど三郎の言葉がわからない絢子はです。さらに言います。

「私が守ってあげるから。お父さんもお母さんもいるし

(じゃあ僕は何をしたらいいんだろう)

三郎は素朴にこう思いました。

(一体)

三郎はこのことを真剣に考えました。ですが。

考えても考えてもわかりません。自分が何をしたらいいかです。

それで悩んでいるとです。一郎と二郎が彼に言うのでした。

「ああ、それだったらね」

「いいことがあるよ」

「やるべきことはもうやってるよ」

「やってるって!?!」

三郎は二匹の言葉にまたしても首を傾げさせました。

第三章

「僕が。もつ?」

「うん、やってるよ」

「このお家に生まれた時からね」

「してるから」

「このままでいいんだよ」

「このままって」

三郎はその言葉にまた考えました。

「僕何かしてたかな」

「僕達もしてるよ」

「ちゃんとね」

一郎と二郎もだということです。

「しつかりとしてるから」

「三匹共ね」

「一体何をしているのかな」

三郎にとっては話を聞けば聞く程わからないことでした。

「僕って絢子ちゃんの為に」

「絢子ちゃん僕達見たら笑顔になるじゃない」

「お父さんもお母さんもね」

二匹はここでこう三郎に話すのでした。

「それだよ」

「それなんだよ」

「笑顔って」

三郎はそれを聞いてまたいぶかしむ顔になりました。

「確かに笑顔になってくれるけれどそれだけでいいのかな」

「笑顔になるって凄いことなんだよ」

「そつだよ。嬉しいから笑顔になるんだよ」

二匹はいぶかしみ続ける兄弟にさらに話します。

「僕達を見て撫でて可愛がって笑顔になっってくれる」

「それで絢子ちゃんの為になってるんだよ」

「そうなんだよ」

「そうだったんだ」

「ここでやっと納得するようなものを感じだしてきた三郎でした。

「僕達つて絢子ちゃんを笑顔にすることで役に立ってたんだ」

「そうそう。絢子ちゃんがどんなに悲しい顔をしていても僕達を見ればね」

「笑顔になっってくれるじゃない」

「そういうことだよ」

「わかったかな」

「これが二匹の言葉でした。

「僕達は僕達で絢子ちゃんの為になってるんだよ」

「確かに絢子ちゃんを守ることとはできないよ」

「それは無理だということです。

「僕達は小さいし力も弱いし」

「戦えないしね」

「それは無理なんだ」

「けれど絢子ちゃんを笑顔にできる」

「それはできるんだよ」

「守れなくても。それはだということです。

「だからそれでいいじゃない」

「できることをしようよ、全力でね」

「そう。それだったら」

「ここまで聞いてです。三郎もやっと頷くのです。

「僕決めたよ」

「どうするんだい、それで」

「これからは」

「いつも頑張つて絢子ちゃんを笑顔にするよ」

「こう言うのです。

「それが僕にできることならね」

「よし、じゃあいいね」

「そうしよう」

二匹も彼の言葉に頷いてでした。

そうして三匹はずっと絢子を笑顔にするのでした。彼女がどれだけ怒っていても悲しくても寂しくてもです。そうして彼女を助けるのでした。それが三郎の決意で彼はそれを見事に果たしたのです。

兎の決意

完

2010・8・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8963p/>

兎の決意

2011年1月2日22時25分発行